

犬のスキンケア

皮膚を痒がって引っ掻いたり舐めたりして、紅斑（限界がはっきりしている発赤）、脱毛、肥厚（皮膚が分厚くなる）、色素沈着（慢性化すると黒くなる）などの皮膚症状は、犬でしばしば見られます。犬の皮膚には汗腺が発達していないので、暑くなってもアセモ（汗疹）を作ることはありませんが、高温多湿の環境で皮膚症状が悪化することが多いようです。夏の時期は皮膚からの臭気に加えて、抜け毛やフケで室内が汚れ、気が滅入る飼い主さんも多いことでしょう。

事態を好転させる第1歩は、動物病院で皮膚検査を受けて、痒みの原因を確かめることです。ノミ、疥癬虫、皮膚ダニのような外部寄生虫、酵母菌や白癬菌に類似する真菌が悪さをしている場合とアトピー（アレルギー反応）やトビヒ（膿痂疹）では治療薬が全く異なります。素人判断で売薬を塗って様子を見ることは避けてください。皮膚検査で原因が判明したら、獣医師からは原因に見合った治療法が提示されます。我々が皮膚科を受診したら、軟膏をもらったり、飲み薬を処方されたりして終わりです。しかし、犬の皮膚病治療はこれが入口で、獣医師から薬を処方されても問題解決するわけではありません。皮膚病治療の大前提として、皮膚を清潔に保つ「スキンケア」がとても大切です。「スキンケア」を怠ると、皮膚病治療は迷宮入りします。

①皮膚病変部（患部）や周囲の被毛をバッサリと毛刈りし、風通しを良くして、清拭しやすくします。患部や周囲の毛根には原因物質（寄生虫、細菌、アレルギー物質など）が多量に付着しているので、毛刈りにより除去できます。毛刈りを躊躇する飼い主さんがいますが、皮膚病が治れば毛は元通りに生えます。患部が内股から腹部に拡大している場合はトリミングサロンで全身をサマーカットすることが治療の早道です。ヒトでは皮膚病の治療と言えば軟膏を塗布しますが、犬は必ず舐め取ってしまうので、動物病院からは原因に見合った薬用シャンプーが処方されます。

②皮膚病の治療には週2回の薬浴が必要です。前洗いとしてぬるま湯（30℃程度）で患部、足先や陰部などを重点的に、首から下の汚れを優しく洗い流します。頭部を濡らすとブルブル（胸震い）をするので洗うのは最後です。

③薬用シャンプーを両手で泡立ててから体をマッサージするように塗りつけます。シャンプーに含まれる薬剤を患部に作用させるのが目的なので、直ぐに洗い流さずに、できるだけ長く泡を付けたままにしておきます。泡だらけの状態を保つことは容易ではありません。このためには、最初に患部から洗い始め、頭部は最後に洗います。こうすることにより、患部に5～10分程度は薬剤を付着させられます。

④ゆすぎのお湯は低めに設定して、泡を十分流してください。その後、手で優しく体全体をなでつけて、水分を足先方向に絞って行きます。高温のお湯やドライヤーの風は皮膚が火照り、痒みを増強させるので避けます。被毛を短くしておけばドライヤーは不要です。

⑤マイクロファイバータオルを使って拭き上げると楽です。耳道に残った水分は、耳道に息を吹きかけると頭をブルブルして排除するので、耳介部を拭き取ってやります。

薬浴だけでも痒みはかなり消失し、臭い、抜け毛、フケなども減って、飼い主も犬もストレスが軽減します。皮膚病の原因に応じた抗寄生虫薬、抗真菌薬、抗生物質など薬剤の内服は獣医師の指示に従って下さい。厄介なのはアトピー性皮膚炎です。環境中の埃や食物中にアレルギー物質が含まれ、原因物質の除去が困難です。長期間にわたり様々な治療法が選択されますが、「スキンケア」が十分行われていれば症状の悪化は防げます。